

持続可能な社会の探究 I 国際協力とジェンダー

家庭科 葭内 ありさ
保健体育科 増田 かやの

1. はじめに

本講座のねらいは、ジェンダーの視点を踏まえて、グローバルに諸問題を捉え発信し得る力を持つ女性リーダー育成を目指すことである。具体的には、貧困や紛争、教育課程、女性の地位の低さの問題等について現状を理解した上で、高校生自身による新たな問題解決手法を探求する。海外の高校生との連携研究や、自己のキャリアデザインも合わせて考えつつ、自ら探求した過程や成果について対外的に発信していく力を養うものである。

2. 今年度の活動内容

前半は、お茶の水女子大学教授による講義やグループワークを中心に活動し、社会が抱える諸課題についてジェンダーの視点からの知識を深め、分析・検討を行った。戸谷陽子教授による講義では、表象リテラシーを学び、三浦徹教授・副学長による講義では、中東諸国の現状及びイスラム教や宗教と国際協力のあり方を考えた。小玉亮子教授の講義では、政治・経済や社会情勢とジェンダーの関係性を多角的に捉える視点を学んだ。各講義後には感想・意見交換を行い、考えを深めた。また、5月連休期間の課題としたシェリル・サンドバーグのジェンダーに関する著書「リーン・イン」の読書会を実施した。さらに Plan International 事務局へのフィールドワークや、国際協力のキーワードである国連 SDGs について学び、具体的な諸問題についても探究を行った。夏休み中の課題としては、ジェンダーや国際協力に関わる社会課題を各自で設定し、調査内容や考察を探求レポートとしてまとめると同時に、国連東京本部主催の高校生スピーチコンテストへの応募を課した。後者においては、東京都大会へ3名が選出され、努力賞を受賞した。

後半は、東京証券取引所 (JPX) が実施する模擬起業体験プログラムを導入した。講座の特色を生かし、国連 SDGs に基づく社会課題を解決するためのソーシャルビジネスとしての模擬起業を4つのグループに分かれて行った。

グループ①：映画上映を活用したジェンダー問題の啓発活動として、啓発映画「GIRL RISING」(提供 Plan international) 上映を中心に、ミニトーク(ゲスト：お茶の水女子大学ジェンダー研究所佐野潤子氏)、LGBT ワークショップ、販売からなるイベントを、他起業3社と合同で12月17日(日)12:15~16:25にお茶の水女子大学講堂にて開催した。イベント名は、高校生によるSDGs達成のための世界におけるジェンダー啓発イベント「What is GENDER? -未来をつくるのは私たち-」である。同時に、フェアトレードコーヒーとオーガニッククッキーを扱う千葉県

館山市のカフェと交渉してオリジナル商品を開発し、自作のジェンダー問題解説リーフレットと共に販売した。

グループ②：途上国における女児の教育機会の平等のための啓発活動として、学校の使いかけのチョークや粉を再生した手作りのチョークを、上記イベントや附属幼稚園にて販売した。材料は、本学附属中学校をはじめ、他校に協力を依頼して集めた。同時に、途上国における女児の教育機会の平等を訴えるリーフレットを作成し、配布した。

グループ③：LGBT 問題啓発のためにワークショップ教材を開発し、上記イベントで実施した。また、神奈川県横浜市の菓子店に交渉して、LGBT を象徴する 6 色のビスコッティと啓発メッセージ入りの包装によるオリジナル商品とポストカードを開発し、販売した。

グループ④：女性の就労問題を解決するための啓発活動として、都内で会社の株式が「なでしこ銘柄」に選定されている企業を訪問し、ダイバーシティ推進事業に関するフィールドワークやアンケートを実施した。その結果を踏まえて、特に男性従業員をターゲットに女性の就労問題解決のためのリーフレットを添付した飴を販売した。飴の販売は、12 月 17 日のイベントの他、(株)ブリヂストン、三井住友銀行、石油資源開発㈱にて行われた。

なお、起業体験プログラムで得られた利益は、女性支援団体や LGBT 支援団体に寄付を行った。イベントや活動は、お茶の水女子大学ジェンダー研究所、外務省、法務省、(株)みずほフィナンシャルグループ、認定 NPO 法人国連ウィメン、ウィメンズアクションネットワーク、文京区等、複数の官庁、企業、NPO に後援を頂いた。12 月 23 日には、JPX と朝日新聞主催の高校生ビジネスプラン発表会にグループ①と④が参加し、グループ④は最優秀賞を受賞した。

2.1. 本時の活動

初めに、2 年生が 4 つの班に分かれ、ポスターセッション形式での探究活動発表を 1 回 5 分で 1 年生に伝えた。全ての班の発表を聞き終わった 1 年生は、色違いの付箋に質問や良かった点を記入し、考えをまとめた。次に、1 年生が 2 年生の班を回り、質問した。その後、2 年生は、1 年生からの質問や交流過程での新たな気づきをまとめ、全体で発表して共有した。

2.2. 生徒の本時の授業評価

対象：2 年生 16 名	対象：1 年生 20 名
発表に対して具体的にコメントができるよう、各グループの発表を聞くことができた。(4.5)	自分なりの疑問や課題をもって臨むことができた。(4.4)

1年生の質問に応じたり、できるだけこちらから声をかけたりしようとした。(4.2)	疑問に感じたことなどは質問カードに記入したり、できるだけ質問したりしようとした。(4.3)
分科会で積極的に話し合いに関わろうとした。(4.4)	分科会で積極的に話し合いに関わろうとした。(3.9)
「探究Ⅰ」の経験者として伝えるべきことを伝えられた。(4.3)	自分なりの疑問や課題に感じていたことを解消することができた。(4.0)
今日の発表会・分科会を通して改めて自分の1年間の取り組みを振りかえることができた。(4.6)	今日の発表会・分科会を通して探究の具体的なイメージをもてた。(4.5)

()内の数字は5段階評価の平均値であり、5が最高値である。

2.3. まとめと今後の課題

生徒の感想として、1年生からは、本時により探究活動の具体的な動きを知ることが出来た、支援の形は様々であり、より発信力が大切である、等が見られた。2年生からは、自らの探究の成果の再確認や、探究活動によって社会との接点ができ、視野を広げることが出来た、学び得たことを進路選択にも生かしたい、等が寄せられた。一方、本授業のみでは、時間的な制約もあり十分な活動報告が出来なかった旨の意見も見られた。授業外に於ける交流や、継続的な活動を支えていくための仕組のあり方が今後の課題と言える。